

2019 年 10 月 27 日（日）「神の答え」

ヨブ 42:1-6

1 ヨブは主に答えて言った。2 あなたには、すべてができること、あなたは、どんな計画も成し遂げられることを、私は知りました。3 知識もなくて、摂理をおおい隠す者は、だれか。まことに、私は、自分で悟りえないことを告げました。自分でも知りえない不思議を。4 さあ聞け。わたしが語る。わたしがあなたに尋ねる。わたしに示せ。5 私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。6 それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔いています。

【序論】

今日は一緒にヨブ記の御言葉に耳を傾けてまいりましょう。実は、ヨブ記からのメッセージは過去に一度させていただいているのですが、記録によりますと、私が全身の肌トラブルに見舞われた 2014 年 1 月でした。あれから 6 年近く経ちましたが、多くの方のお祈りに支えられてこの働きを続けてくることができました。今は少々厄介な手荒れに悩まされておりますので、引き続き回復のためにお祈りいただければ幸いです。

聖書というのは、同じ箇所から同じ人間が読み、あるいはそこから語るにしても、その人の状況の変化や霊的成長によって、解釈が変わってくるものです。今日は 6 年前のメッセージとは違ったものを用意しました。ヨブ記はこの世界の「苦しみ」の問題を扱っている。私にとって人生のテーマであり、一生かけて探求し、恐らく結論も出せないまま終わるものではないかと思っております。すっきりしない言い方かもしれませんが、それこそがヨブ記のメッセージだと思われるのです。

【本論】

本論 1. ヨブの正しさ

ヨブ記は一人の人物の驚くべき紹介文で始まります。「**ウツの地にヨブという名の人がいた。この人は潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっていた**」(1:1)。「ウツ」という地がどこのことなのか明確には分かりませんが、「アラビヤ砂漠に近いエドム東部¹」という説があります。イスラエルから見ると外国であります。彼は神を畏れる生活をしてい

¹ 新聖書注解

ました。家族の中では祭司の役割を果たし、息子たちの隠れた罪のために絶えずとりなしをしていました（1:5）。ヨブ記には律法や宗教上の規定が出てこないことから、アブラハム等の「族長時代」を背景とした書ではないかと考えられています（約 4000 年前）。

ヨブについて「この人は潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっていた」と言われているように、彼の生き方は誰が見ても誠実であり、非の打ち所がありませんでした。これは、彼に罪がなかったということではなく、本書全体の文脈で捉えるときに、「何かの罪の結果災いが下った」という因果応報思想を断ち切るための表現だと思われます。ただ実際、ヨブ自身の自己認識は驚くべきもので、彼は心においても神に対して潔白を証明できるほどだったということです。そのことを代表する箇所を挙げてみましょう。

私は自分の目と契約を結んだ。どうしておとめに目を留めよう。（31:1）

この一文にヨブの生き方のすべてが現れていると言ってもよいでしょう。ヨブは自分が女性に対する弱さをもつ人間であることを自覚しています。その上で尚、神の前での誠実を第一としたのです。妻以外の女性に決して目を向けないと。

また、彼は慈善にも怠りがありませんでした。

もし、私が寄るべのない者の望みを退け、やもめの目を衰え果てさせ、私ひとりだけで食物を食べて、みなしごにそれを食べさせなかったのなら、—私の若いときから、彼は私を父のようにして育ち、私は、母の胎にいたときから、彼女を導いた—もし、私が、着る物がなくて死にかかっている者や、身をおおう物を持っていない貧しい者を見たとき、彼の腰が私にあいさつをせず、私の子羊の毛でそれが暖められなかったのなら、あるいは、私を助ける者が門のところにいるのを見ながら、みなしごに向かって私の手を振り上げたことがあるなら、私の肩の骨が肩から落ち、私の腕がつけ根から折れてもよい。

（31:16-22）

ヨブは金銭面でも潔癖でした。

神からのわざわいは私をおびえさせ、その威厳のゆえに、私は何もすることができないからだ。もし、私が金をおのれの頼みとし、黄金に向かって、私の抛り頼むもの、と言ったことがあるなら、あるいは、私の富が多いので喜び、私の手が多くの物を得たので、喜んだことがあるなら、あるいは、輝く日の光を見、照りながら動く月を見て、私の心がひそかに惑わされ、手をもって口づけを投げかけたことがあるなら、これもまた裁判にかけて罰せられる罪だ。私が上なる神を否んだためだ。（31:23-28）

更に、ヨブは敵を呪うことさえしませんでした。

あるいは、私を憎む者の衰えているのを私が見て喜び、彼にわざわいが下ったとき、喜び勇んだことがあろうか。私は自分の口に罪を犯させなかった。のろって彼のいのちを求めようとしなかった。（31:29-30）

本論 2. ヨブの苦悩

このような生き方を貫いていたヨブに、突如として災いが降りかかりました。しかも、それは神の承認の下に行なわれたサタンの攻撃であったというのです。サタンは、ヨブが立派なのは、立派に振る舞うことで利益を得ているからではないか、と神を挑発します。もし神がお与えになったすべての持ち物を奪ったら、ヨブは本性を現し、神を呪うに違いないと(1:9-11)。ヨブの真実な心を知られる神は、サタンの挑戦を受けて立ち、ヨブをサタンの手に渡されました。

初めて聖書を読む人ならば、何てひどい神なのだろうかと思うことでしょう。神はご自分の民を守るべきではないのか。誠実に生きている者が苦しむのを阻止すべきではないのか。そのような「神へのつまずき」が生じる可能性のある内容です。しかし、神はまったく自由な意志で、何者にも縛られることなく、サタンをはるかに凌ぐ知恵をもって、物事の決断を下されます。まず、このところに人間の常識では到底理解できない神の御心があると言えるでしょう。

人は様々な疑問をもちます。なぜ罪のない人を巻き込んだ凶悪な犯罪が起きるのか。なぜ戦争がなくなるのか。なぜ飲酒運転による犠牲者とその家族が苦しみ、加害者は平然と生きているのか。こういった疑問に答えるのは困難であり、答えを出すこと自体が不可能なのかもしれません。ある人は、この世には三つの種類の「質問」が存在すると言っています。

- ①容易に答えることのできる事実に基づく質問
- ②研究と思索を必要とする質問
- ③答えることのできない質問

人間は答えの見出せない疑問に直面するとき、怒りの持って行き場を失い、神を責めるかもしれません。こんなにひどい出来事が起きている世界を放っておく神様なんて、信じられないと。あるいは、無理に答えを引き出そうとして、かえって苦しみの中にある人を傷つけ、苛立たせてしまうこともあるでしょう。

ヨブに降りかかった災いは、第一にすべての持ち物が取り去られることでした。シェバ人の襲来、(恐らく)落雷、カルデヤ人の襲来、そして突風によって、ヨブに属する多くの人が命を失いました(1:13-19)。すべてが間髪入れず、とても偶然起きた出来事とは思えないほどの連続性をもっていました。事故で我が子を失う悲しみ、一瞬にして訪れる別れは、筆舌に尽くしがたいものがあります。ヨブは自分の身に何が起きているのか、理解することができなかったでしょう。しかし、これだけの苦難を経験しても、彼は神を呪いませんでした。

そして言った。「私は裸で母の胎から出て来た。また、裸で私はかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。」(1:21)

場合によっては、これでヨブ記は完結してもよかったでしょう。しかし、サタンは執拗にヨブを攻撃し続けます。サタンは真の信仰者をどうにかして脱落させたい。核になる人物は狙われる傾向があります。第二の災いは、ヨブの体に関するものでした。全身を悪性の腫物で打ち、その苦痛によって神を呪わせようとしたのです。「**皮の代わりには皮をもってします**」(2:4)という言葉の意味は捉えにくいですが、これは当時の諺であり、動物の皮を他の同等の価値あるものと交換することの表現でしょう。ヨブは自分の命のためとあらば、手段を選ばないはずだ。その心を転ずるだろうということを言っているのです。この時にヨブが罹った皮膚病が何であったかは明確には分かりませんが、その症状は、全身が化膿してズキズキと痛み(7:5)、悪夢を伴い(7:14)、かさぶたが剥がれ落ちて皮膚が黒ずみ(30:28, 30)、息が臭くなり(19:17)、過度に痩せ(17:7, 19:20)、熱が出て(30:30)、昼も夜も苦しむ(30:17)というものでした。象皮病か、天然痘か。

私も西東京市牧師会では「東伏見のヨブ」と呼ばれています。私が皮膚炎に加えて患ったコリン性蕁麻疹という病気はまことに厄介なもので、体が熱を帯びると全身が針で刺されるような苦痛に見舞われるものです。あまりの苦しみに、夏場は発狂しそうになりました。ヨブには到底及ばないまでも、その一部を経験させられたかなと思っております。病気は私だけの問題ではありません。この教会でも様々な病との闘いの中にある兄弟姉妹がいらっしゃいます。そして、「なぜ私だけが苦しむのか」という問いと格闘しながら、歩んでこられた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

ヨブに追い打ちをかけたのは、妻の言葉でした。「**それでもなお、あなたは自分の誠実を堅く保つのですか。神をのろって死になさい**」(2:9)。彼女のこの言葉には明らかにサタンの影響があります。神を呪わせることは、サタンの目的そのものでした。この言葉が記録されているところに、これを言われたヨブがどんなに苦しんだかが現れているでしょう。彼は最も身近な人にも理解されることがなかったのです。しかし、それでも彼は神を呪いませんでした。彼が呪ったのは自分自身と生まれた日でした(3章)。

本論 3. 友人たちの回答

さて、2章の終わりから、ヨブの三人の友人が登場します。「デマン人エリファズ」「シュアハ人ビルダデ」「ナアマ人ツォファル」(2:11)です。この三人の友は、当初の目的ではヨブを慰めるために来たのですが、結果として思わぬ方向へと進んでいってしまいます。彼らが良かったのは最初だけでした。彼らはヨブのあまりの変容ぶりに衝撃

を受け、声をあげて泣き、上着を引き裂き、塵を天に撒き散らし、七日七夜地に座って、一言もヨブに話しかけなかったというのです(2:12-13)。これで終えておけばよかったのですが、彼らは苦しむヨブと議論を始めてしまいます。4章から延々と続く友人たちとヨブの議論は、詩文形式で書かれているため、その内容は理解しにくいのですが、解釈のポイントがあります。友人たちは元々慰めるためにヨブを見舞ったにも拘らず、結果的にヨブに降りかかった災いの原因とはヨブが犯した罪にあると断定している。要点をまとめてみましょう。

①エリファズ

ヨブは有罪であり、彼にふりかかったすべての問題は、彼の側の罪と咎の結果である。

②ビルダデ

神は正しいお方であり、罪のない人を罰することはない。あなたが苦しんでいるとすれば、それはあなたの犯した何らかの罪によるものに違いない。

③ツォファル

誰も神の深さを理解することはできない。神がなさることと、私たちに起こってくることは、私たちの理解を超えている。ヨブは正しい人ではあるが、災いを被ったということは、それに相応する罪を犯したにちがいない。それを悔い改めれば幸せが来ると。

こんなことを言われたら、当事者は怒らないわけがありません。ヨブもあれこれと言いますが、彼は単純に自分が罪のない人間だと主張しているのではなく、この災いが友人たちの言うような因果応報による神の審きだとは考えられないという意味で反論しているのです。

2008年に岩波現代文庫から出版された『なぜ私だけが苦しむのか ～現代のヨブ記～』という本があります。H.S.クシュナーというユダヤ人ラビが書いている書物です。キリスト教的な視点ではありませんので、注意深く批評しながら読む必要がありますが、人間の心を深く理解している著者だというのが率直な感想です。立場の違いに注意して読むならば、全体として、ヨブ記を理解する助けとなります。一箇所引用してみましょう。

聖書のなかのヨブの友人のことを憶えているでしょうか？三人の友だちがヨブを訪れた時、彼らは心の底から、多くのものを失い病に苦しむヨブを慰めたいと願っていました。しかし、やることなすことほとんどみな裏目に出て、結果的にはヨブをますます嘆き悲しませることになってしまったのです。ヨブの三人の友だちの失敗を通して、人生に傷ついた人はなにを必要としているのか、また、友として隣人として、私たちはどうすればどのような人を助けてあげることができるのか、学ぶことができるかもしれません。 ♪ 彼らの最初のまちがいは、ヨブ

が「なぜ、神は私をこんな目にあわせるのか？」と問うた時、ヨブが質問を発しているのだと思ひ、その質問に答えてやればヨブを助けることになる、と考えたところにあります。実際は、ヨブのことは神学的な問いなどではまったくなく、悲痛の叫び声だったのです。ヨブのことはのあとに続くものは疑問符（？）ではなく、感嘆符（！）であるべきだったのです。☛ ヨブが友人たちに求めていたものは——「神はなぜ、私にこんな仕打ちをするのか？」と言ったときヨブがほんとうに求めていたものは——神学ではなく、思いやりの心だったのです。神についての説明などではありませんし、まして、自分の神学の欠陥を指摘されることでもありませんでした。ヨブは友人たちに、自分はほんとうに正しい人間で、ふりかかったこの災難は悲劇的であり、まったく公平を欠くものである、と言ってもらいたかったのです。☛ しかし、友人たちは神について話すことに熱中するあまり、ヨブのことなどほとんど眼中にないかのようでした。《中略》 ヨブは助言より同情を必要としていました。《中略》 彼が必要としていたものは、苦しみを分かちもってくれる愛情だったのです。説得するように神の意志の神学的な説明をするのではなく、だれかが自分の痛みをわかってくれているのだという実感だったのです。《中略》 怒り、泣き、叫ぶことを許してくれる友を必要としていたのです。「元氣を出せよ、ヨブ。悪いことばかりじゃないんだから」と言うような人ではなく、「ああ、なんてひどいことだ、どう考えたらいいんだ」と言ってくれる人が必要だったのです。(pp.137-140)

ヨブと3人の友人の議論の後に、若者のエリフが口を開きます(32-37章)。彼の主張は、以下のようにまとめることができるでしょう。

- ① 神は人を訓練なさる。
- ② 人は神を理解することができない。
- ③ だから、自らを賢いとはせず、力と公正と正義の神を恐れよ。

エリフは概ね正しいことを言っていますが、この言葉によってヨブが慰められていないことは明らかです。神は訓練のためにヨブを苦しみの下に置かれたものではありません。

本論4. 神の回答

最終的に、神ご自身がヨブに語りかけます。神はヨブの質問には一つもお答えにはならず、何と天地万物の創造の模様を滔々と語り続けるだけ。なぜこんな答えをなさるのか、私はずっと疑問に思ってきました。実は、ポイントはどこにあるのです。神がヨブの問いには直接答えておられないということが重要なのです。ヨブ記の結論とは「人には分からない」ということである。しかし、神は創造について語ることによって、ヨブが抱えている問題のすべてに答えてくださいました。

第一に、神は「世界」という巨大な絵を見せることで、「自分の苦しみ」しか見えなくなっていたヨブの視野を無限大に広げてくださいました。第二に、神はヨブを万物の起源（そして目的）とは何であるかという問いに向かわせました。その答えは神です。第三に、神は万物の起源について語ることによって、ヨブが有限なる存在であることを教えてくださいました。人間には分からないことがあって当然なのだと。

神は時に「解答なしに答える」ということをなさいます。人間の性質として、一見答えを求めているようでありながら、ただ聞いてほしい、ただ共感してほしいということが多くあるでしょう。意見など言われたくないことが大半です。自分の状況に理解を示し、気持ちを受け止め、「そんなふうに感じたんだね」「苦しかったんだね」と涙を流してくれる友を必要としているのです。そして、信仰者はそこで終わりなのではなく、その上で一緒に神を見上げることができる。答えが分からない者同士が、無限なる神と同じ方向に見つめるのです。ヨブ記が赤裸々に綴っている友人たちの失敗は、現代人がやっている失敗そのものとも言えます。人の心はいつの時代にも変わることがありません。苦しんでいる人さえも責め、説得し、議論してしまうかもしれないのです。しかし、神は沈黙しておられる。いえ、聖書を通して、ヨブ記を通して語っておられます。人には分からないことがある。しかし、神にはすべての答えがあるのだと。

【結論】

この地上には、ある程度容易に答えられる質問もあれば、相当勉強しなくては答えられない質問もあります。そして、もう一つは神の領域にしか答えがない質問もあります。第三の質問に対して、私たちにできることは、「分からない」人に共感することであり、その人と一緒に神を見上げることでしょう。そして、永遠の世界ではそれがきっと分かるということも、添えて伝えて差し上げることはできます。無理に答えを出す必要のない問いがこの世には多くあり、私たちは神の最善を信じて歩み続けることのできる存在であるということを、今日は心に留めたいと思います。

【祈り】

天の父なる神様。この世は苦痛に満ちています。まったく何事もなく、人生を終えることなどできません。人生に終わりがあるということ自体が、自分にも周囲の人々にも悲しみをもたらします。人の苦しみの意味は、私たちには分かりません。あなたの御心も悟れないことばかりです。それが私たち有限なる人間なのです。しかし、私たちは互いに愛し合い、慰め合うことができます。あなたが与えてくださった、人を思いやる心によって、泣く者と共にあることができます。私たちの口から、人を裁く言葉を取り去り、その人の「叫び」そのものを受け止める心を下さい。そして、今苦しんでいる人には、慰めをお与えください。私たちが隣人のために祈ることを、あなたは望んでおられるでしょう。そして、あなたはその祈りを無に帰することはなさいません。あなたを永遠の領域で信じ、苦しむ人と共にあなたに目を向けたいと思います。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
人知を超えた御心をもって、歴史を導いておられる、
父なる神の愛。
ヨブにもまさる苦しみを味わい、すべての人の重荷を負い給う、
主イエス・キリストの恵み。
地上にあつて、泣く者と共に泣き、叫ぶ者と共に叫ぶ愛と思いやりに生かしめ給う、
聖霊の親しき交わりが、
我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。